

批評を封殺する透明性

〔六万四千漢字〕発表会来賓挨拶

(一五分版)

鈴木一誌記

一九九八年六月一七日

四月のある日、蓮實重彦さんから電話があり、東大明朝の発表会があるから、そこで発言しなさいとのことでした。それには伏線がありまして、東大明朝が、情報処理学者、デザインや組版、書体設計や印刷史の専門家のあいだで話題になっていきますと、学長としてではなく知人としての蓮實さんに、二か月ほど前に手紙で知らせておいたわけです。

またそれは、日本文芸家協会の要望書やトロン・プロジェクトといっしょになった文化的に注目してもよいひとつの動きだ、ということもつけ加えておきました。少なくとも「ISコード批判」という点では歩調をそろえています。新聞各紙が同じ論調で取りあげているのは、私には異様な風景と写りました。

文字コード問題に関しては、私よりはもっとふさわしい方がいると言いかけたら、蓮實さんから、いやーデザイナーの立場でよいと一蹴されまして、こうしてここに立っています。

蓮實さんの考えは、東大明朝「六万四千漢字」が悪いものであるはずはないけれども、内輪でほめあっているのもだめだから、外部の感想をきかせることができるならやってみなさいというものでしょう。

こういう大事な集まりで話すわけですから、私も緊張して、先週、十人ほどの友人を前に挨拶の予行演習をしました。早口で二十分以上かかりました。それでは長いので、今日は十五分ぐらいにしたいと思います。

さきほどお渡ししたレジュメには、予行演習でしゃべったものを収録してあります。また、ここでは話しきれないさまざまな人からの東大明朝への質問や

疑問をもまとめて掲載してありますので、よろしければあとでお読みになってください。あと、いくつか発言や書かれたものの引用をしますが、その出典もレジュメをご覧ください。

【注・三〇分版は <http://www.linclabo.com/gmincho.pdf> で公開】

「六万四千漢字」の実物を全体として見た人は、いままで開発当事者をのぞいてほとんどいませんが、さまざまな資料を付き合わせていくと、東大明朝が六万四千字で完成とは思えないので、「東大明朝」と呼ばせていただきます。

東大明朝は、民主主義的に制作されようとしていると思います。しかし、その民主主義的であろうとすることによってかえって権力として見えてしまっているのではないか。そのことについてお話ししたいと思います。

東大明朝に関する資料を読んでいると、頻繁に「収集、整理、精選、析出」との語彙が出てきます。たとえば、「収集」に関しては、漢和辞典や百科事典、電話帳で使われている人名・地名の外字リスト、印刷業界で使われている約二万字の文字フォントなど、「結局のところ、約一三万字を収集したことになる」とあります（『漢字六万四千字のフォントセット公開に向けて』パンフレット。豊かな文字文化を創り上げるために』所収、以下「漢字六万四千字」と略称）。そこで強調されるのは、現在日本で流通しているということです。

私はこのような収集方法に、民衆主義を大事にしようとする姿勢を感じます。ひとりのヒーローが、強烈なイニシアティブで漢字をまとめあげるのではなく、世間から認知されている漢字のグループをおだやかに集合させていこうということです。

しかし、と思います。

世間に流通している文字セットを束ねて、重複や誤りを「整理」すれば、おのずから「精選」と「析出」の規準が浮かんできて、大きな文字セットができるという考えがちがっているのではないのでしょうか。漢和辞典や百科事典は、それぞれひとつの作品・著作です。ひとりのヒーローがとは言いませんが、一定の意志によって文字や語彙が集められたものです。電話帳で使われている人

名・地名の外字リストなども、限られた目的のためにあります。

「印刷業界で使われている約二万字の文字フォント」も、印刷業界一般というものはどこにもなくて、ある印刷会社がさまざまな仕事を長いあいだ請け負っているうちに集積された文字が約二万字あるということにすぎません。ある漢字は、ㄨという出版社の本のために作り、ある珍しい数十字の漢字は、ㄩという出版社の中国を舞台にした小説のために作ったものというのが実状です。さまざまな漢字グループを一緒にして攪拌し、沈殿したおりを取り除けば、澄んだ漢字のエキスだけが残るといっことは幻想ではないでしょうか。

あらゆる文字セットは、特定の目的のために、あるいは目的意識をもって作られています。規準と方針がちがう文字セットを集めても、ひとつの体系をもった文字セットはできません。本来は、一次資料に基づいて漢字は収集されるべきことはおわかりだと思いますが、あえて今日流通している二次資料に頼ることにしたのだと思います。なぜなら、一次資料に基づくなら必ず収集者の判断と解釈が介入せざるをえないからです。民主主義的でありたいとする気持だが、解釈と判断を避けようとしています。

民主主義的な手続きが、文字セットの体系性をあきらめさせます。でもそれははじめからわかっていたことです。田村毅さんは、新聞の取材で、

「日本語の新たな規格化ではなく、漢字のデータバンクをつくろうという考えだ」と、発言されており（「東京新聞」一九九八年一月二八日）、他の文章でもたびたび「漢字データ・ベースの構築」（「漢字六万四千字」）という言葉をお使いになっています。

「誰が、いつ、どこで使うのかはわかりませんが、使えというのではなく、使いたい人が使いたいときに使えるように、現在および過去において使われてきた漢字を可能な限り収集し、電子文字として用意しておく必要があるのです」（「漢字六万四千字」）

ともおっしゃっています。体系性の積極的な拒否です。東大明朝六万四千字に体系性がないというのは、非難でもなんでもなく、東大明朝を特徴づけるも

のです。複数の字形をなるべく多く集め、どの字形を選ぶかはユーザーに任せ、それが東大明朝の発想の原点だったと予想します。それが東大明朝の提案する民主主義です。いつでも使用可能な状態で待機している漢字の貯金箱、といったイメージで私は東大明朝をとらえます。すると、選択肢は多ければ多いほどよいわけだから「無限の」文字セットが理想となり、

「あらゆる文字を区別しコード化する」

という坂村健さんの発言と呼応します。シンポジウム『TRONWARE』50号一九九

八年四月、パーソナルメディア株式会社）で中沢けいさんが

「大は小を兼ねるわけで、たくさんある中から選べばいいわけで、小さなものの中から選べというのは無理だと」

と発言され、それを受けて坂村さんが

「そう、一度一緒にしちゃったらもう元にもどりませんからね」

と、おっしゃっているのは、大によってさまざまな多様性を包もうという発想と理解します。小さな文字セットは大きな文字セットになるという発想と、大は小を兼ねるという考えは鏡あわせになっています。

しかし、無限という現実はありません。いざ実装となると、結局、有限の六万四千字ということになります。それでも六万四千字もあれば、だいたいの要望には応えられるだろうという姿勢です。大は小を兼ねるといふ発想は残っている。いつぼうでは、田村さんは、東大明朝について記されたネット上の文章をこう結んでいます。

「漢字辞典」(コード表)を作るのが当面の目標である」(東京大学総合研究博物館 web) 活字から電子文字へ」

「漢字辞典」である以上、それは作品・著作であり、六万四千字であることに主義主張がなければならぬ。六万四千字が膨大な数であるとしても、有限であるからには、「精選すれば六万字ぐらいにはなる」(「漢字六万四千字」)とおっしゃる「精選」の規準が求められる。一二万字には「むろん重複はある」(「漢字六万四千字」)とも書かれています。どのような技術によって重複が点検されたの

かもおききたいところです。

規準がないものにコードが振れるのか、これが私の疑問です。どんどん総数が増えていく宿命にある文字セットに、どうしたらコードが振れるのか。コードが振れるのならどんな規準によって六万四千字を選んだのか。包摂規準はだれがどこでどう運用したのか。ここで東大明朝は明らかにぶれていると思います。

文字を作るとは、現実に影響を与えたいということでしょうが、同時に民主的でありたいというジレンマが、いろいろな局面に出てきている。規範をもたないことから出発したゆえに無限を標榜せざるをえなかった漢字の群が、現実の前で有限となり、規範をもったものとして現われてきています。

なぜそこまでして体系的性を拒否しようとしたのか。質問を変えれば、なぜそこまでして民主主義的であろうとするのか。

漢字が足りないという実感は多かれ少なかれ誰もがもっていて、東大明朝はその実感から出発しています。漢字が足りないというユーザーの率直な感想に基づこうとしている。東大明朝には、ニーズから自然に導かれたものだという自負があるようです。

だが、漢字が足りないという実感の内実は、ひとりひとりちがっているはずです。ある文学者のニーズと明日しゃべる朝礼の枕を探している課長ではちがう。少なくとも書くのか読むのかでちがうはずです。

東大明朝は、ひとりひとりちがっている実感確かめようとしません。目的が異なる小さな文字セットの集合によって大きい文字セットをつくらうとして、多くの文字の収容によってさまざまな実感を包んでしまおうとしている。

何が表現できていないのか、何が理解からこぼれ落ちるのか、その吟味がなくては事態を解決できないはず。名前があるはずのユーザーやニーズを無名のものとして扱おうとしている。そこに、民主主義の名における転倒があると思います。

小さな文字セットの集合が大きな文字セットになるという発想は、異なった階層のあいだが透明性で結ばれるという信仰に基づいています。同じ透明信仰が、具体的なかたちをもたない抽象的な文字の集合としての文字を考え、あとで具体的な文字のかたちをあたえようという発想になるのだと思います。

字体が文字の骨格ともいえる字形になってそれに肉付けがされて、はじめてわれわれの目に触れるという図式そのものがちがいます。字形は、書体ないしは書風をとおしてしか実現されないのです。透明性への信仰は、字体、字形、書体をも透明性で結んでしまいます。

だからこそ、書体による字形のちがいに無自覚になります。「天」という字も、横棒二本の上と下のどちらが長いかは書体によるのだそうです。そうした事情を無視して、もともと明朝体にはなかった字形を文字セットに逆輸入してさらにそれに文字コードをあたえるという転倒を演じます。

さらにその透明信仰が行き着くのが、「テキストは文字の集合」という考え方です。「テキストは文字の集合」というスローガンは、パンフレットの見出しからの引用（漢字六万四千字）ですが、われわれが作品に出会うとき、無色透明な文字に遭遇したのちに具体的な文字に行き当たっているわけではない。いきなり、具体的な文字にぶちあたっているのです。ひとつひとつの文字に出会っている暇もなく、一挙に作品に包まれている。文字がそこにあるという事態もない。

一文字でも、文字がスクリーンやページにあるとき、何かの文脈をとまっています。ほんとうに「テキストは文字の集合」なのですか。われわれは文字をひとつずつ読んで、それを集合させてテキストを読んでいるのですか。

私たちは言葉を聞くと、頭に文字のイメージを思い浮かべる。だが、最初に文字のイメージがあってそれを具体的な書体に当てはめたのでは決してない。私たちの文字は、多くの具体的な文字の記憶の集合なのではないでしょうか。個別とともに普遍があるのです。

東大明朝は、字形の規範としてひとり歩きしていきます。漢字フォントは六

万四千字ないと商品化できないという暗黙の圧力が発生します。さらに、東大明朝で出ているのですから出してください、という外字作成の要望が印刷現場に増えることは容易に想像できます。太い明朝やゴシックはどうなるのでしょうか。東大明朝のおかげで外字が増えるという笑えない事態が起きます。

ある漢字があります。その字が、東大明朝のコードに含まれるのか東大明朝にとって「外字」なのかを調べるのは、膨大な作業になります。規準が明示されていないからです。重複の技術についてお聞きしたのはそういうわけです。

☆これ以降は話すことができなかった

フリーコーのいう「顔を欠く視線」にさらされることになります。東大明朝は「いたる所で待伏せする六万四千もの目」となるのです。スクリーンフォントで六万四千字の差が表現できるのかという疑問もあります。開発者の民主主義は、かならずしもユーザーの民主主義にはなりません。大は小を兼ねない、多いことによる弊害にも思いを馳せるべきです。出入り自由で規準の明示のない文字の収容は、一見、多様性の尊重に思えますが、現実の文字生成の多様性を殺すことになりかねません。さまざまな文字を収容すればするほど、それ以外の文字を少数者として排除してしまいます。

「テキストは文字の集合」だとする発想が、文字セットにも現われています。透明な文字の集合である文字セットも透明だと言っているように見える。透明な文字セットなのだから、典拠や規範から逃れられると言いたいようなのです。規範がないという批判にたいして、文字が出ればよいというユーザーの立場にするりと逃げるしかけになっている。誰が意図したのではなく、責任における透明な構造ができてしまっています。

透明性の信頼というか信仰に、悪意はないと思います。しかし、透明性が、ユーザーの実感一般やニーズ一般という無名性・匿名性と手を結ぶとき、透明であることは別の力を発揮することになります。

東大明朝は、コードとしての普遍性をめざしているのか、書体としての普遍性をめざしているのかは、今のところ分明ではありません。でもすでにひとつ

の権力としてあります。それは、東大明朝が東京大学や学術振興会がタッチしているからではなくて、規準がない非公開なものとして見えていることによっています。透明だから、公開すべきものはないという論理に行き着いてしまします。体系性がないことは逆に批評を封殺します。民主的と思われる手続きが、民主制を圧迫する皮肉があります。

「漢字が足りない」「漢字を救え」と、同じ論旨での記事が、新聞各紙に何度も載りました。それは、いくつかの誤解までも歩調をそろえていました。プロパガンダという言葉を思い出します。このように同じ記事を載せることが、普遍性への到達といえるのか。

ユーザーの実感、ニーズという無名性に依る東大明朝と、「中立公平・客観報道」という無名性に基盤を置く新聞とが手をつないだ構図です。さらにその輪に日本文藝家協会が加わっています。文藝家がこれからどんな不特定多数に頼ろうとしているのか考えざるをえません。

以下の結語はかろうじてしゃべることができた

価値観がちがうコードががばらばらにあるのではなく、おだやかに共存することは技術的に可能なのではないのでしょうか。それは、シフトJISにのらないの話ではなく、文字集合の典拠と基準を公開することからはじまります。

(終わり)